

第2回検討会における意見の概要

【横浜市の国際園芸博覧会をA1クラスとして開催することについて】

- この園芸博は今の日本が色々な意味で別れ道にある中で、重要な意義をもっている。都市の中での農業とコミュニティの新しいモデルを作って見せていくことは、すごく重要な意味がある。
- 2027年に開催されるというのは、2050年の世界を展望しながら、我々自身が、激変する社会変容にどのように対応するのか、非常に重要な命題。
- 環境と食料について、相当ジャンプした対応の仕方をしていくべき。環境の方は気候変動のみならず、企業の生産性の問題、働き方改革の問題も孕む。食料も2050年の世界人口が98億人と見込まれている中、約60パーセント増しの食糧生産をしていかなきゃいけない。それに対して、デジタルと違う要件を用意しておく、生命のリアリズムみたいなものを示していくことだろう。環境の変化に対して、我々自身のライフスタイルや社会をどう変えていくのか、ということに対しチャレンジングする園芸博覧会となるべき。
- 横浜市は、神奈川県の中でも、人口が最も大きい、都市化が進んだ地域である一方、農地面積、農家戸数においては、神奈川県で一番大きい、という特徴がある。将来の先端的な都市型農業がいかにあるべきかを示す拠点を横浜で形成することは、国が横浜で博覧会を開催する意義づけとなる。
- 園芸博覧会を開催する意義は、園芸の振興というのが中心であるという共通認識を持ってほしい。
- 博覧会は未来を志向するものだが、過去を志向する博覧会も面白い。特に、日本の歴史は、自然との関わりがあり、ここにも重きをおいて、開催理念を書いてもらいたい。

【国際的な参加招致について】

- 国交省は、国土の均衡ある発展ということに踏み込んで、農水省は花以外の農業について書き込んで頂きたい。政府出展で何をやるかということにつながる。
- できるだけ多くの国に出ていただくのと同時に、共通したテーマで展示して頂くといった工夫もすると良いのでは。
- 跡地を農地として残すからいいということではなく、新しい暮らし、新しい都市をつくりあげるための一つの契機として、Society5.0と全く対局の概

念が、園芸博の場合はあっても良い。緑とか園芸とか、AI を使えば良くなるという部分と、決して AI では実現できない部分も持っているのではないか。

- 都市と農が本当の意味で融合した、21 世紀のアジアないし日本型の田園都市をどういう風に形成するか、といったことが重要な命題で、この博覧会はそのバックキャストとして、一里塚としてどういったことをすべきなのか、ということ念頭に考えるべき。
- Society5.0 という社会は、同時多発的に構造化されない、あるいは系統性がない要因、これを動的に上手く制御することができるような社会。日本において昔から都市と農が、特に郊外部において、何となく共存してきたというそのものの姿ではないか。21 世紀の私たちが構想すべき田園都市というのは、両者が融合しうまく動的に制御されている社会ではないか。
- インターネットや AI というものはむしろ背景として、人類の社会課題もしくは世界的な課題を解決して、どのように、より人間らしくステージをあげて、まさに文化の形成まで取り組んでいけるのか、そのモデルを提示しようと結集するのはすばらしいこと。
- パブリックセクターだけではなく、民間セクターが積極的に公領域、公共空間を作っていくのに取り組めるのではないかと期待している。また、環境に負荷を掛けないで人間の文化を営むというときに、スポーツは一つ重要な役割を果たせるのではないか。
- 里地里山は、日本人にとって伝統的な原風景。それをキーワードとすることで、園芸、緑、農を通じて、生物多様性、SDGs、健康づくり、様々な今日的課題をどういうふうこれから考えていくのかを発信できるのではないか。

【具体的な博覧会の会場計画やコンテンツについて】

- ツーリズムの考え方をとり入れてもらいたい。今は、自然環境との共生、特に、水、エネルギーについて強く配慮したエコツーリズムであることが前提。また、見るだけでなく、体験できるアドベンチャーツーリズムを取り入れていけないか。視力に障害のある方でも、花や緑を体験できる認知できるとか、ユニバーサルデザインがひとつの大きな核になると思う。
- 新しい博覧会場のモビリティというものも自動運転もあるが、日本らしい、新しい時代のモビリティを先駆的に見せていけるのではないか。
- 園芸文化とか、日本的な伝統的な文化を、博覧会の中でどういう風に表現していくか、グリーンインフラの中に里地里山の知恵を盛り込んでいけるのではないか。
- 横浜の底力を信じているが、新たな提案は感じられない。これからの時代、こういうことができれば人は幸せだよねという提案をしてもらいたい。今、

一部の人は、将来 Youtuber という一方で、無農薬農業で生きたいという人がいて、両極が融合していない。両方を融合するような良い時代を作るために、花や緑は役に立つのでは。

- 国外も含め、これをやっていった方が地域・社会・企業にとって得だ、と思われるような施策を、しっかり見据えていかないといけない。

【上瀬谷地区のまちづくり及び博覧会のレガシーについて】

- 大規模な防災拠点として博覧会の会場の跡地を整備する、これは横浜にとっても、国にとっても大きなレガシーとなる。
- よりダイナミックに広域的に展開していく戦略が必要。広域的な郊外部の将来設計をどうしていくのか、国の方でも先導的に取り上げて、関係自治体を広く巻き込む、横浜市は都心部を巻き込む、ということをやしてほしい。
- 2030年、2050年を目指し、農業、食糧生産の現場がどうなっているか、どうあるべきかを実際に見せ、博覧会後も引き続き農業経営というもの、儲かる農業経営とはこうだ、というモデルが示せるとよい。
- 横浜市には、博覧会を開催する上で前提となるフィジカルファクトを示して欲しい。輸送計画をつくるにしても、入場者数をどれくらいが適当であるのか、量を目指すのか、フィジカルな考え方を投影していくことが重要。
- 未来社会を展望しながら、そこからのバックキャストで考える博覧会としては、残念ながら全体の検討の構図が、やや20世紀型でないか。例えば、ゾーニングは20世紀の知恵であって、21世紀としては、ゾーニングを超えるような空間の制御を考えられなければいけない。

【市民や地域住民からの支持、サポートについて】

- 2027年までに機運を盛り上げる上でも、あの土地を素晴らしい形で活用しないとけない。
- 大阪花博、その14年後の浜名湖花博により、国民の方々の園芸、花、緑に対する知識レベルが随分上がったのが印象的。今回の園芸博も一つのステップとなるように準備して頂きたい。
- 2027年までに日本全国、自然災害等が次々起こると思うが、それ一つ一つに対応していく姿に視点をあててもらいたい。また、経済波及効果が全国の園芸のこれからの発展に寄与されるような博覧会になればよい。
- お願いとして、幸せの思い出のある風景を壊すことがないように、古いソメイヨシノの並木、あの古い桜の木をしっかりと守って、残して頂きたい。